

# お薬のしおり

## インフルエンザワクチンについて No.62 (H18.11)

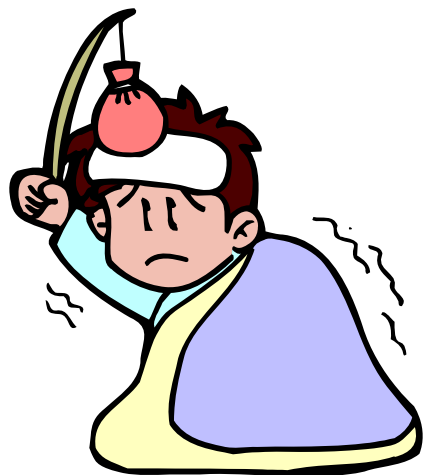
東京医科大学病院 薬剤部

「インフルエンザワクチンは接種しても効かないから」と思っている人はいませんか？確かに現行のインフルエンザワクチンは、ウイルスに対する感染防御や発症阻止の効果は完全ではありません。

しかし、効かないという人の多くは、インフルエンザと「かぜ」が区別されずに混同されているのではないのでしょうか。インフルエンザワクチンはインフルエンザウイルスにしか効果を示しませんが、「かぜ」の原因となるウイルスは100種類以上もあるのです。ほとんどの人は冬季には「かぜ」をひきますので、これらのインフルエンザウイルス以外の「かぜ」ウイルスの感染をうけて「かぜ」をひいた場合でも、「ワクチンを接種したのにかぜをひいてしまったので、ワクチンは効かない」との誤解が生じるのです。

これまでわが国では、ハイリスク群といわれる65歳以上の高齢者などに対するインフルエンザワクチン接種を積極的には行っていませんでした。それ故、ハイリスク群におけるワクチンの効果について詳しい研究成績はほとんどないので、米国でのワクチンの効果を参考にしてみましょう。これによりますと、ワクチン接種によって、65歳未満の健康者についてはインフルエンザの発症を70～90%減らすことができます。また、65歳以上の一般高齢者では肺炎やインフルエンザによる入院を30～70%減らすことが出来るとされています。老人施設の入居者については、インフルエンザの発症を30～40%、肺炎やインフルエンザによる入院を50～60%、死亡する危険を80%、それぞれ減少させることが出来るとされています。

このように、インフルエンザワクチンの効果は100%ではありませんが、高齢者を中心と



したハイリスク群において、肺炎などの合併症の発生や入院、死亡といった重篤な健康被害を明らかに減少させる効果が示されています。これは世界各国で広く認められており、この事実に基づいてハイリスク群を主な対象としたワクチン接種が勧告され、その実施が積極的に進められています。

従って、わが国でも、ハイリスク群の健康被害を防ぐことを第1の目標として、インフルエンザワクチン接種を積極的に奨める必要があるものと考えられます。

インフルエンザに対する治療薬もいくつか発売されていますが、感染前にワクチンで予防することがインフルエンザに対する最も有効な防御手段です。特に65歳以上の方や基礎疾患を有する方（気管支喘息等の呼吸器疾患、慢性心不全、先天性心疾患等の循環器疾患、糖尿病、腎不全、免疫不全症（免疫抑制剤による免疫低下も含む）など）では、インフルエンザが重症化しやすいので、かかりつけの医師とよく相談のうえ、接種を受けられることをお勧めします。

インフルエンザの流行株は毎年変化しますし、ワクチン接種による重症化の予防に有効な免疫レベルの持続期間はおよそ5カ月となっていますので、毎年シーズン前にワクチン接種を受けることが必要です。今年流行が予測されるウイルスにあったワクチンを、インフルエンザが流行する前に接種し、免疫を高めておくことが大切です。

また、インフルエンザワクチンには微量ながら卵由来の成分が残存していますので、これらによって発赤やじん麻疹などの局所反応やアナフィラキシー・ショックが出現する可能性があります。卵アレルギーの人はワクチン接種を避けるか、注意して接種する必要があります。ワクチン接種の際には、問診表に体調などを正しく記入し、発熱など体調が悪い時にはワクチン接種を避けるなど、医師と十分に相談して接種することが必要です。



当院でもインフルエンザワクチンの接種は可能ですので、希望されるかたは主治医に相談して下さい。（任意接種ですので費用は自己負担となります。）